

イチゴ品種‘さちのか’の沖縄におけるランナー発生および増殖特性

沖村 誠・登野盛博¹⁾・曾根一純・北谷恵美
(九州沖縄農業研究センター¹⁾ 沖縄県農業試験場)

Makoto Okimura, Hiroichi Tonomori, Kazuyoshi Sone and Emi Kitadani :
Runnering and Propagation of Strawberry Cultivar ‘Sachinoka’ in Okinawa

亜熱帯沖縄におけるイチゴの冬季短期栽培技術を開発するため、これまでに適品種として早生性、浅休眠性、良日持ち性および良食味性を有する促成用品種‘さちのか’を選定した。本報では、‘さちのか’の沖縄における効率的な苗生産技術を確認するため、ランナー発生に及ぼす低温処理および親株定植時期の影響について検討した。

1. 材料および方法

沖縄農試園芸支場において、‘さちのか’と対照品種‘とよのか’を供試した。

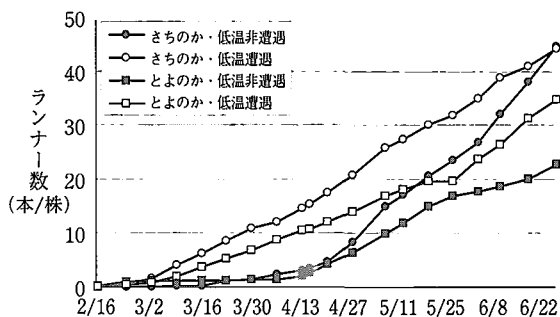
実験1：低温処理：1月末まで九州沖縄農業研究センター野菜花き研究部(久留米)の無加温ガラス室で育苗した苗(低温遭遇区)と沖縄園支の雨よけハウスで育苗した苗(低温非遭遇区)を、2月1日に長さ60cm、容積10lのプランターに3株ずつ計9株定植し、雨よけハウスで栽培し、ランナー発生数と採苗可能な子苗数を6月下旬まで調査した。

実験2：親株定植時期：8月中旬に沖縄農試園芸支場における栽培試験供試株から採苗し、翌年2月に定植した親株から発生した一次ランナー苗(子苗)を二次親株として用いた。処理区として子苗を5月15日、6月1日および6月15日に定植した区および慣行の親株定植区を設けた。子苗は定植2週間前に10.5cmポットに採苗し、実験1と同様にプランターに定植し、雨よけハウスで栽培した。一次ランナーの発生数と子苗数を8月中旬まで調査した。

2. 結果および考察

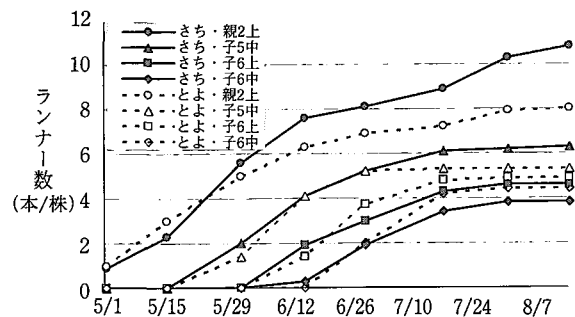
実験1：ランナーの発生は、‘さちのか’、‘とよのか’ともに低温遭遇の有無に関係なく2月中旬頃からみられた。発生数は、両品種とも3月上旬から4月中旬の間は低温遭遇区が低温非遭遇区より多かったが、4月下旬以降は両区間に大差なく、6月上旬以降は‘さちのか’の低温非遭遇区で急激に増加した。6月中旬には‘さちのか’では両区ともに‘とよのか’より多く、株当たり40本程度に達した(第1図)。採苗可能な子苗数は、8月中旬には‘さちのか’では低温遭遇区、低温非遭遇区ともに30本/株以上であった。

実験2：親株定植区におけるランナー発生は、‘さちのか’では‘とよのか’より1週間前後遅かったが、5



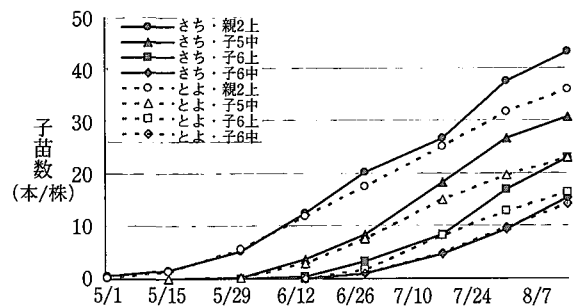
第1図 ランナー発生に及ぼす低温の影響

月初旬以降は急増し、7月中旬には株当たり10本程度となった。子苗を二次親株として定植した区では、いずれも定植直後からランナーが発生し、7月中旬の株当たり発生数は5月15日定植区で6本、6月1日定植区で4本、6月15日定植区で3本程度であった。7月中旬以降はいずれの区でも一次ランナーの発生はほとんどみられなかった(第2図)。



第2図 一次ランナー発生数に及ぼす親株定植時期の影響

親株定植区における子苗数は、‘さちのか’ではランナー発生が早い‘とよのか’より初期は少ないものの、5月中旬以降は多くなり、5月中旬で株当たり5本、6月上旬で10本、6月中旬で15本程度であった。また、子苗定植区における8月中旬の株当たり子苗数は、5月15日定植区が30本、6月1日定植区が23本、6月15日定植区が15本であった(第3図)。



第3図 子苗数に及ぼす親株定植時期の影響

以上の結果から、‘さちのか’は沖縄の自然条件下では低温処理により休眠打破しなくてもランナー発生数が多く、本品種の効率的な苗生産方法として子苗を二次親株に用いる二段階採苗法が有効であった。‘さちのか’の冬季短期栽培において、採苗適期の8月中旬¹⁾までに本圃定植に必要な子苗10,000株/10aを確保するには、親株40株を2月にプランターに定植し、5月下旬から6月中旬に発生する子苗400株(40株×10)を採苗・定植すればよいことが明らかとなった。

引用文献

- 1) 中島規子・宮城信一・高市益行・久場峯子・荒木陽一：園学雑 69 (別2), 341, 2000.